
私の中の坂道

桜 侑樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の中の坂道

【Nコード】

N4687D

【作者名】

桜 侑樹

【あらすじ】

幸せな家庭を築いた女性が離婚を決意した。それまでの生活を自らの手で崩壊させていくことになる。幸せになりたくての結婚だったし、幸せのはずだった。それなのになぜ、その生活にピリオドを打ったのか。女心の不思議をストーリーにしました。

第1話【その時】

【その時・・】

電車はトンネルをぬけて、大阪の街全体を見下ろしながら長い下りの坂をゆつくりと走っていた。

朝の通勤時間帯。

この電車の前にも、満員の電車が走っていて、ちょっとした交通渋滞を線路上でおこしてる。

だから窓の外の風景もゆつくりかわっていく。

私は気持ちに余裕がある時はこんな風景の移り変わりが大好きだ。

その日は天気もよく、遠くまで続く青空の下に白っぽいビルたちが大きさを争っているかのように乱立している市内がはつきりと見えた。

大阪にしては珍しく、もしかすると海までもが見えそうな気配を感じるほど空気が澄み切っていた。

そんな風景を今でもはつきり思い出すのは、ぎゅうぎゅうの満員電車が嫌いな私は、いつも通りの1本早い各駅の電車に乗り、ドアを背もたれがわりにして立っていたから。

今となつてはそれが何月の何日であつたかは思い出せないけど、夏から秋になる頃だったと思う。

思い出される青空がそんな青空だから。

いつもとかわらない電車・・

いつもとかわらない時間・・
いつもとかわらない風景・・
なんら私のまわりは変わっていなかった。

なのに、私の前を何者かがかけぬけて行ったかのようにそれが頭をよぎった。

その瞬間、急に私の目にいつ溢れてもおかしくないほどの涙が溜まり、それを留めるために息をこらしている呼吸が苦しかった。

少し乾いた唇を開けてそこから空気をいっぱい吸い込み、そして静かに吐いていく・・

呼吸なるものを意識したことなんてなかったが、今はそれが自分には必要だと感じた。

吸って・・

吐いて・・

大きな深呼吸はできない。

だから1回、1回をすごく意識して、呼吸を調整した。

それは周りにいる人に「私」という存在を特別に気にして貰いたくなかったから。

自分でも恐かった。

今私の近くに私の心の中を見れる人がいたら・・・。

考えたらちよつとぞつとした。

こんなにも普通の顔のまま、すごいことを心の中で考えてる私に自分でも驚いていた。

そして偽善者のように、ときどきする心をあやすかのような優しい声でそつと自分に問いかけてみる。

なぜ、今なの？

なぜ、その答えなの？
なぜ、それを幸せと感じるの？

こんな「なぜ」に対する答えを、私自身が用意してるわけもないので、「なぜ」がおもちやのボールのように音もなく、心の中を行ったり来たりしてた。

この言葉がよぎった瞬間の気持ちを言い換えると、まるで、ややっこしい数学の問題にぶち当たって、自分の知っている中で一番難しい方程式を使つてその問題を解こうとしたけど、行き詰まり、投げ出した。それが、ある日ふつとしたことで簡単に答えを見いだしていた。
そんな感じだった。

「離婚」を決めた瞬間だった。

その日の朝、私はいつも通りに起きて、主人を起こし、娘を起こして朝ご飯と一緒に食べた。

特に主人の好きな物を作りもしなかったが、嫌々作った記憶もない。ただ、小さい娘が食べやすいものと思って用意したにすぎなかった。

7時を過ぎたころ、玄関で先に出勤する主人を見送った。

娘は小さい手を一生懸命ふって見送った。

主人は自分こそ幸せな人間の代表選手であるかのように胸を張って、笑みを浮かべて娘と私に手をふって角を曲がった。

私は食事の後かたづけをし、娘の小さい口の歯磨きをして、保育園

へ娘を送った。

ホントに、いつものことを、いつものようにしただけの朝だった。

人生ってこんな風に答えをみつけるものなのだろうか。

いとも簡単に・・・

いとも自然に・・・

この瞬間、私は自分の人生に大きな節目をつける決心をしたのだった。

主人が憎いわけではない。

嫌いなわけではないが、答えはもうそれしかない・・・という確信すらあった。

人様から見れば、その時の私は十分に幸せに見えるはずであった。

何不自由なく暮らせる生活は、なにごとにも代え難いものであることを私自身も十分に知っていた。

でも、だめなのである。

今のままでは絶対に私は幸せになれないのである。

自分の人生を間違ったまま進んでいくような感じが心の奥底でしていた。

電車はゆっくりと坂道を降りきって、大阪の市内へと入って行った。心臓の鼓動は少しはやく打っていたし、目の前の風景はどんどん変わっているのに私の目にはまだ坂の上から見下ろすように見えたあの大阪市内の街がはつきりと残っていた。

第2話【恋愛の時】

その時の私はいつも恋をしていたと思っていた。

今でもその気持ちは変わらない。

それは、本能みたいなもので、心の中でいつも誰かへ熱い思いを持っているこそが「人生」みたいなところがある。

思いを抱く相手の男性に愛されたいとか、抱かれたいとか言うものではない。

ともかく自分がちゃんと誰かを愛おしく思い、恋しいという感情を心に秘めていたいのだ。

心の中に愛する人がいると、毎日ささいなことで喜びや切なさとか、いろんな感情が沸々と湧いてくる。

それが最高に素敵だと思えるし、それが私にとって生きている証なのである。

朝起きて夜眠るまでに、たとえわずかな時間であったとしても、ワクワクしたり、うっとりしたり、切なくなったり、苦しくなったり・

女性として生まれてきた以上、このような感情という美しい波に翻弄されることが生きているうでの大切な要因の一つなのである。

ただ、その感情というものが、必ずしも自分でコントロールできるものではなく、そこに生まれた愛が死ぬまで続けられることでないこともわかっていた。

それは、今までの人生で、何回私の心は砕かれ、灰となつて私の手のひらから舞っていったか……。その苦い経験に基づくものである。

東京に生まれ、親元でひたすら大事に育てられた私も、20歳で社

会に出た。

入社した会社に慣れ始めたその年の夏頃になんともなく気になりだした10歳も年上の男性ができた。

廊下ですれ違う度にぺこつと自分からお辞儀する。

彼がどんな表情で私とすれちがっているかすらわからない。

でも、すれ違ったというだけでその日の私は超ハッピーなのであった。

会議室の前を通った時、扉が急に開いて彼が飛び出してきたことがあった。驚いて立ち止まってしまった私に、「悪いけどこれ20セツトコピーしてきてくれる？」と頭を下げて頼んでくれたことがあった。

彼が手にもっていた書類を渡された時、その書類が宝物になった。1セツト多くコピーしてそつとそつと自分の引き出しに隠し持っていた。

そして、それから間もなく偶然にも、彼のプロジェクトの手伝いをするよう上司から言われ、彼と共に過ごす時間がいっぱいできたのだった。

仕事を通して知った彼は大変知的で大人であり、まだ社会に出て間もない私をとてかわいがってくれた。

仕事の途中でお腹を空かす私を気遣って食事を食べに連れていってくれたりもした。

そして、そういった時間を過ごすごとに、二人が徐々に引かれあつていくのがお互いにわかっていることもなんか不思議であり、自然であった。

その頃の私は彼に逢うために出社しているようなものだった。

正直、顔と体型は私の好みとはかけ離れていた。しかし、彼と一緒にいる時、まさに私は恋する乙女であり、彼の仕草のひとつひとつ、言葉のひとつかけらすらとても愛おしかった。

真正面から彼の気持ちを打ち明けられてはいなくても、彼の視線に愛を感じてそれがとても幸せで夢のようだった。

しばらくして、一緒にやっていた仕事が終わリ、その打ち上げを口実に、二人で冬の河口湖にドライブに行った。都心から車でそう時間のかからない場所だったが、社内恋愛を嫌がる会社であつたため、いつどこで同僚らに遭うかわからない都内から少しでも離れたかつたのだが、二人だけの秘密ができたことも私には素敵なプレゼントのようだった。

私服姿の彼

雪にじやれる彼

真面目に運転をする彼

会社では見られなかつた彼の姿を目に焼き付けていた。

その初めてのドライブの帰り、家の近くの駐車場で私は生まれて初めてのkissをした。

エンジンを切つた車の窓は曇つていたし、とつくに日は暮れていたので、外を歩く人がいたのかどうかもわからないけど、初めて男の人の唇を自分の唇に感じた。

kissつて唇と唇を合わせることだと思つていたから、彼の舌が私の歯に当たつた時はおどろいた。さらに、力がぬけたとたんに、彼の舌が私の舌をさがすように口の中でうごめいていることに更に驚き、ちよつと恐く、恥ずかしくもあつた。

彼の手のひらはコートの中に滑り込んで私の胸をやさしくつまんでいた。

さすがに10歳も大人の彼はそこまで自分自身にブレーキをかけてくれた。

多分私が身体をこわばらせて、小さくふるえていたのが伝わったのだろう。

それから長い時間、ひたすら腕の中で抱きしめてくれた。

そして、何を話すわけでもなく、長い私の髪をなで、頬をなで、耳を触り・・・ずっと見つめてくれていた。

なんて素敵な時間なんだろう。

私はなんて素敵な人を愛したのだろう。

それから、週末毎にデートをするようになり、春を前に彼は私に両親と会って欲しいと言ってきた。

九州から彼の両親が私に会いにきてくれると言ったのだ。

それが何を意味してるのかはさすがの私もよくわかっていた。

私も家に帰り自分の両親に彼の両親に会うことを告げ、母からその後でよいから家に連れてくるようにとも言われた。

このあたりからだんだん、浮かれているだけではないけない関係になつてきたことが周りの動きによってわかってきて、彼と逢うことすら緊張するようになっていた。

そしてこの後、「結婚」というものが二人の「好き」という気持ちだけでできるものではない・・・ということを嫌って言うほど思い知らされることになるのであった。

第3話【つれづれに・・・】

彼のご両親とは都内の有名なホテルでお会いした。

お昼のコース料理を頂きながらだったが、私は生まれて初めてというくらい緊張して、せっかくのお食事の味なんてわからない状態だった。

ご両親から、何かを問われれば「はい」とか「いいえ」を笑顔で答えるのが精一杯で、その「はい」や「いいえ」に何かを付け加えて話すことはできなかった。

彼のご両親は私にとって未知の世界の年齢の方々だった。簡単いうと私のまわりにはいらっしやらない年齢の方々だったのだ。私の両親より15歳くらい上で、お祖母様よりはだいぶ下で。

未知の年齢の方だから話しができなかったと思ってきたが、今思えばあちらのご両親の視線が恐かったから話しができなかったのかも知れない。

話を聞いていても、彼と彼の両親にしかわからないような話をしているようにしか思えなかったし、割って入ったらそれこそ失礼になるのえはないかとも思え大変難しい時間であった。

時間がたつにつれて、場に慣れてくるところか、彼のご両親の言葉も彼の言葉もだんだん私の耳には入らない状態になってきて、早くこの時間が終わらないかなって願うようにさえなってきた。

多分、こんな風に思い始めたからか、私の顔からも笑顔は消えていたかもしれない。

12時にお会いして3時間くらい一緒に時間をすごし、彼の運転でご両親を都内の彼のお兄様のご家族のところまでお送りした。

彼が両親を連れてお兄様のマンションに入っていたが、なぜか、私は車で待っているよう言われた。

結構長い時間またされたような気がして、だんだん心細くなっていた。

彼が車に戻ってきた。

私の様子も見ることなく、黙って車を運転し出す彼だったが「家まで送るから・・・」と一言だけ言った。

なんか、怒ってる？私、何か悪いことしたかしら？

ちよつとドキドキして、一人うつむいて助手席で大人しくしていた。

しばらくして彼がウインカーを出して車を路肩に止めた。

そして私に向かって

「なんで、何も話をしないんだよ。せつかく君に会うのを楽しみに両親が来てくれたのに。なんで君は話をしないんだ？両親が気に入らなかったか？・・・すごいがっかりしたよ。いつものように何で明るく話しができなかったんだよ。」

彼は怒りをハンドルにぶつけるように手を拳にしてたたいていた。

頭に石が落ちた。

本当に石が落ちたようだった。

この言葉って本当にこういう経験をした人しかわからないだろうけど、本当に石がおちてくるのだ。

確かに、彼のご両親と楽しくお話ができなかったのは私なのだから怒られても仕方ないのだけど、ご両親はお兄様の所で彼に「あの子にはあなたには相応しくないわ・・・」と言われたらしい。

それを聞かされ私はさらに落ち込んだ。

彼への恥ずかしさもあって、すぐに車から降りたかったが、自分が今どこにいるのかもわからないく、じつと助手席に身を縮めて座っ

ていた。涙がぽつり・・ぽつり・・と落ちていく。運転してる彼に気づかれないようにと外を見てるふりをする。

いつもはメソメソしたら慰めてくれる彼が、その時は全く慰めてくれることなく、「泣きたいのはこっちだよ・・」とさらに私を突き落とした。

着物の小紋の柄の上にぼたぼたと涙が落ちて、それがしみとなるように柄の色合いを微妙に変えた。

早く帰りたいかった。

自分の家に、そして自分の両親のところに。

その時は、彼の腕の中に安心できる場所はなく、ひたすら自分を守ってくれるであろう両親のところに帰りたかった。

いつもなら家まで送ってくれる彼が、今日はこれから一人で帰って・

・となんていう駅が分からないが駅でおろした。

「ありがとう。あと・・・今日はごめんなさい。」

彼の車はそのままお兄さんの家へと引き返して行ったようだった。

私は一気に抜け殻の状態になってしまっただけはそれだけの場にたらずんだままだった。

それから彼とは何回かデートをした。

でも、前とは違い、二人の間になんか雲がただよっているような感じでのデートだった。それでも私は彼の事が好きで好きでたまらなかった。

いつそ彼の前で死んでしまったら彼は私の亡骸を抱きしめて泣いてくれるだろうか？それとも関わりたくない川がどこかに捨てるだろうか？

それとも殺して・・って言うたらどうするだろうか？デートの最中

にそんなことを考えることもあった。

彼の気持ちが自分から離れて行ってるように思えたから、それを繋ぎ止めようと思って、こんなことを考えていたのかも知れない。

彼もご両親との間でさぞやつらかったことだろうと、今では察することもできるが当時は自分の気持ちをもてあましていてそれどころではなかった。

そんなある日、雨の降る中彼と都内で食事をしてその後、彼の車でいつもの通り私の家に向かって新青梅街道を走っていた。

目の前に大きな交差点があった。だいぶ先で信号は赤に変わった。

しかし、彼はブレーキをすることなくその交差点に飛び込んで行った。

「止まって！！！！赤！！」と大きな声で怒鳴ってしまった。

彼は急ブレーキを踏みながら私のお腹あたりを押さえて、私が頭からフロントガラスにつっこみそうになるのを必死に止めてくれた。

間一髪で車は事故を免れた。

恐かった……。

いったいどうしたんだろう……と彼を見た。

彼も顔面蒼白だった。

「俺……君に話しておかなくちゃいけないことがあるんだ……」
彼が静かに言った。

時間は既に夜の10時を過ぎていたが、とても大事な話であることはわかったので、私はうなずいた。彼は車を静かな場所に止めて八

ンドルを抱くようにして話し始めた。

「赤とか緑とか色がわからないんだ・・・」
え？何を言ってるの？

「わかるか？俺の見える世界には色がないんだよ・・・」と。
今思えば、なぜ彼が運転免許がとれたのかわからないが、頭のよい彼のこと・・・多分問題なかったのだろう。

私は彼が言っていることが分かっていたが、真実だとは受け取り難いものがあつた。

だからすぐばからしい質問をした。

「・・・この大きな木・・・あなたにはどう見えるの？」

彼はふつと寂しそうな笑顔をみせながら

「君にどう見えてるかわからないから俺には答えようがないよ・・・
でも、この葉っぱの部分と幹の部分と同じに見える・・・っていう
とわかるかな？」

私は頷きながらも実際には想像ができなかった。

幹と葉っぱが同じ色？

彼は続けた。

「俺の両親長崎で被爆してるんだ。多分そのせいではないかと言われている。だから、両親はこんな俺を育てるのに必死だったよ。特に母親なんて・・・クレヨンを出して、これは緑というの・・・あなたにはどんな風に見えてるのかわからないけど、これは緑っていうの、わかった・・・覚えなさい。これは草の色・・・木の葉っぱの色・・・
そして・・・って教えてくれた。」

しばらく沈黙してた。

外の雨はだんだん強くなっていって窓を音をたててたたいていた。でも二人の気持ちは、というか私の気持ちはその雨の音がだんだんしずめてくれた。

「俺のこと・俺と一緒にいるとこういうこともある・今信号があつたことがわからなかった。多分商店街の電気がいっぱいあつたから信号を見落としたんだと思う。普段は信号の順番でわかってるだ・・・。恐い思いをさせたね・・。ごめん。」

「ううん・・大丈夫。」

彼は黙って私を抱きしめて、おでこにkissをしながら「君が無事でよかった・・。」と聞こえるかどうかくらいの声でつぶやいた。その言葉に彼に私への愛が残っていることがわかりすごくほつとして彼の胸の鼓動をじっと聞いていた。

第4話【粉碎した心】

彼とは週末ごとにデートた。ただ、結婚と言う言葉はお互いタブーとなり、二人の成り行きを心配している私の両親への紹介も延び延びになっていた。

ある日、都内をドライブしている時、彼がある女子大学の門の前に車を止めて「君、今の会社を辞めてこの大学に入るつもりはない？」と言う。

門に掲げられている名称をみて、驚いた。有名なお嬢様大学だ。それもそれなりの頭がないと入れない。

私は自分の出た学校に不満はなかったし、短大とはいえその学年ではトップクラスの成績になって今の会社に入った。その私のがんばりや今の気持ちも聞きもせず、一方的に折角入った会社を辞めて、彼との結婚のために大学受験しろという彼にむつとした。

そんな私の気持ちを知らず彼は淡々と付け加えた。

「あと4〜5年したら俺は海外支社へ転勤になると思う。あつちに行ったら同業者の奥さん同士の集まりもある。その時、君が大学を出てないと肩身が狭くなるだろう？だから今のうちに行ったらどうかかな・・・とと思って。」と。

「それって、もしかしてお母様に言われたの？私が四大を出ていないとお母様にの気に召さなかった理由の一つなの？」

彼は否定もせず黙った。

そしてしばらくして、「俺と一緒になるつもりがあるのなら、大学のこと一度考えておいてくれ・・・」

私と一緒にするために、彼なりに考えてくれているのは確かだけど、それが私の気持ちとはちぐはぐになっている。

私だって、彼をすごく愛してるし、大切な人に変わりはない。でも、

彼の行動にとまどいを感じ、心はつまされていくばかりだった。

数日後、彼の申し出を何気なく両親に話した。両親は激怒した。しまったと思ったがもう遅いく、両親は私の今までの生き方を否定されたのと同じだと言い、さらに、親のいいなりになる男のところになど嫁に行くなど言い切った。

これで両方の両親から二人の結婚が反対されたことになった。

もう、無理かも知れない、一緒になることは。

でも、この彼への気持ちはどうしたらよいのだろうか。

夏になって私は高校時代の友人たちと旅行に出た。家には二泊三日だと言つて。

一泊だけして二日目には友人たちをおいて、先に新幹線に乗り帰京し、彼に東京駅まで迎えにきてもらつて二人で夕飯を食べに行った。彼はいつもの休日のデートの時のように、遅くならないように気を配り、送るよと車に私を招いた。

高速への入り口の緑の掲示板が見えた時、彼の顔をみずに「私、今日、まだお友達と泊まっていることになっているの。だから家には帰れないの。」とドキドキしながら言つてみた。

彼は大きなため息をついた。

すでに高速の入り口を避けることはできずそのまま高速に乗り、二股にわかれる時に家とは違う方向にいく路を選んで走り出してくれた。「何を君は考えているだ……。もし、俺の都合が悪かったらどうするつもりだったの？」

「考えてなかった・・・そんなこと。」

彼は高速を川崎インターで降りた。そして、ぐるぐる回つてとあるカップルが使うホテルに入った。

もう夜も遅く、部屋は一部屋しか空いてなかった。

彼と部屋に行っても、彼はぶすつとしていた。実際は私は喜んでもらえると思ったのに彼の反応は違っていた。作戦は失敗だった。

私は旅行鞆を持ったまま部屋の入り口で立っていた。

彼は「早く入っておいで。そんなところに立ってないで・・・」と私の行動が、さらに彼の憤りを増させたようだった。

しばらくして、ずつとうつむいて黙っている私をベットへ行こう・・・と目だけで誘った。

私は初めて男性と同じベットに入るのでどうしたらよいか、さっぱりわからずおどおどしていた。

洋服を自分で脱いでよいものか、どこまで脱いでよいものかもわからなかった。

仕方なく、スカートとブラウス・・・そしてストッキングを脱いで彼の横にすつと入った。

なんか悲しかった。

そこからどうなったのかは今では全く思い出せない。

ただ、最後まではいけなかったことだけは確かだった。

「大丈夫・・・君はまだ処女のままだよ」と言われた。

愛している人にどうやって抱かれたらよいのかすらわからなかったが苦痛だったことは確かだった。

そつとベットから出て洗面所で血のついた手を洗い、そばにあったタオルを絞って身体を拭いていた。

「シャワー浴びておいでよ・・・」なんか冷たい声だった。

シャワーを浴びて、下着をつけて彼の寝ているベットにもどった。汚れたシーツははいであった。

そつと彼の腕まくらに頭をのせて、彼の胸に顔を埋め眠ろうと努力してみた。

彼の「大丈夫・君はまだ処女だよ。」という言葉の大丈夫という言葉がなんか寂しかった。

愛してるなら自分のものにしたくはなかったのだろうか？

いつもkissして抱きしめてくれて、その先はずっとお預けのままでよかったのだろうか？

普通の男性なら抱きたいと思うのが普通なのではないだろうか？
彼がどうして私を抱きたがらなかったのかは今でもわからない。

その後のデートでももう、二度とホテルに誘われることはなかった。
それから間もなく、彼から「君にはもっと他に相応しい人がいると思う。今日でお別れしよう・」そう告げられ私の熱い恋は粉々に砕け散ったのだった。

第5話【苦い日々】

私の人生最大の失恋。

れまでの20年ちよつとの人生の中で失恋してたことがなかったようにさえ思えた。

この彼に対する「大好き」な気持ちをどう扱ったらよいのかわかず、ただ苦しい日々が続いていたように思う。

何をみても、何を聞いても、何を食べてもまるで色のない世界のようで無味乾燥な日々が始まった。

お互い愛し合っていた時には同じ会社にいられることがとてもうれしく、最高の会社に思えていたが、いざ、こういう状態になるともう最悪で、出勤することすら大変な重荷になった。

朝、起きての服を選ぶにしても、彼に見せたいだけに今まで選んでいた基準がなくなり、全く服装やおしゃれに興味がなくなった。ひどい時は、前日着服をまた着て行こうとして母にとがめられたりもした。

同じ会社にいるということは、階段ですれ違ったり、会議で同席したりする機会があるということ。

私は、以前と変わらず彼の姿を見れば、胸がドキドキした。なのに、彼は会議では、付き合っていた時と距離を変えることなく、私を避けることもせず、単に私とつきあった数ヶ月を記憶から抹殺したかのような仕草だった。

彼は平気で「これコピーしてきて・・・」と書類を私に託す。私はもしかしたら、その書類の一番上に彼からのメッセージが隠されているのではと一瞬喜んだりしたが、ことごとく裏切られ、往生際の悪い自分が情けなく、悲しさが増した。

彼とお別れして翌週土曜日の会議。

あいも変わらない彼の態度や仕草に、私は、もしかしたら彼は私に何かを気づかせようとして、一旦お別れを言い渡しただけかもしれないとか、私をまたあの腕にだきしめてくれるかもしれないと思わせた。

しかし、会議中に目と目があつた瞬間に、淡い期待がいつぺんに崩れ去った。彼が私から視線をはずしたその仕草には私に嫌悪感を感じてる仕草そのものだった。私は、とてもその場にいることが耐えられず、途中退席して他の部屋に逃げ込んだ。

流れ落ちる涙を止める術もなく、誰もいない部屋でひたすら声を殺して泣いた。

彼とお別れしてから一度もこんなに大泣きしていなかったので、その時は本当に心が悲鳴をあげるかのごとく激しく泣いた。

泣きながらソファーに突っ伏しているとふっと私の髪をなでる手を感じた。

私は驚いて顔を上げた。

彼が私をおいかけてきてくれた・・・と思ったから。

でも、顔を上げた先にあつたのは同じ部署で真向かいに座る見慣れた同期の男性の顔だった。

「声かけたけど返事しないし・・・どうしたの？何かあつたの？」とちよつと恐いようなそれでいて優しい目で問いかけてきた。

その見慣れた顔に、まるで兄に言いつけるように告げた。

「失恋したの・・・私。ふられちゃったよ・・・大好きな人に・・・」その答えを聞いて、彼は少しだけ笑顔を見せながら

「そうか、失恋しちゃったのか。それは泣くしかないね。そういう理由だったら、他に誰か入ってこないように入り口で番しててやるからもつと泣いちゃえよ。それですっきりしたら飯でも食いにいこうぜ・・・」と言った。

「うん・・・」

と返事をするかしないかのうちにまた、涙がどつと流れてきて結局同期の彼のワイシャツの袖をぐしゃぐしゃにしながらしばらく泣きじゃくっていた。

どれくらいの時間泣いたのか分からないが、涙も枯渇してきて自分がなぜそんなに悲しいのかを分析してる冷静な自分が現れ出した。

「落ち着いた？そろそろ飯いこうぜ。俺、腹減ってるんだ。つきあえよな。お前は失恋したからご飯が食べれない、っていう乙女タイプじゃないもんな。行こう、行こう・・・」

とまるでじやれるように私たちのデスクのある部屋へむかって歩きだした。

ぽつんと誰もいない廊下に取り残された私は、こんな姿を見られた恥ずかしさが初めて頭をよぎり、とりあえず化粧室で顔をあらってメイク無しの顔のまま彼とご飯を食べにいくことにした。別れた彼以外の男性と食事に行くのは随分久しぶりのことだったし、メイク無しの顔で社内を歩くことも初めてだった。

ただ、会社の玄関をでたら、私に当たる風がとても優しく感じ、空気がとてもすがすがしく感じた。

まだまだふっきれたとはいえないが、下ばかり向いていたこの2週間を振り返り、今からは少し顔を上げて歩いていく努力をすることにした。

「俺っていっぱい失恋してるから。なんかあれば聞いてよ。」と同期の彼は天津飯をがつがつ食べながら言った。

「何かって、何があるの？」と聞き返すと「んゝゝ何かって・・・何もなければは・・・早く食えよ。俺がくつちまうぞお前の分も・・・」と更にがつがつ食べ出した。

私はあんかけ焼きそばを少しずつ口に運び、もたもたと食べ始めた。それを見て彼は「よしよし・・・」と言わんばかりに、空になったお皿を前にして水を飲みながら、つまらない社会情勢の話を勝手にしやべり続けた。

食事が終わって会計に行くと、「今日は失恋記念におごってやろうと思ったが、それをやると変な記念日をつくることになるから・・・割り勘だ。」と言い訳をした。

失恋記念日か・・・そうだ、私は失恋したんだ。もう、あの日に帰ることはないんだ。

いい加減あきらめなくちゃ。

外に連れ出してくれた同期に「ありがとう。」とつぶやいた。泣き疲れた声は枯れ果てていて、彼に聞こえたかどうか位の声だったはずだ。

彼は妹をあやすように私の頭をなでて、「おっし！仕事にもどろろぜ！」と妙な元気で歩きだした。

その時私はふつと気が付いた。

その彼が私のことをいつも大事に思っていてくれたことを。

見栄えもさっぱりしないし、口も悪い。

それでも、会社では同期で一番のエリートで、人の良い彼は仕事をなんでも引き受けて、大変忙しかった。恋愛して、デートなんてできるはずもなかった。

仕事に一途な人。女なんかには全く興味を持たない堅物人間。これが会社での彼の評価だ。

でも、その彼のちょっとした仕草から、私への優しいいたわりを強く感じ、私はちよつとうれしかった。

人間失格の烙印がおされたような出来事の後だったからか特に嬉しかったかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4687d/>

私の中の坂道

2010年11月20日03時14分発行